

大正四年七月の「仙人」

芥川龍之介と中国文学

成瀬哲生

—

芥川龍之介には、「仙人」と題する小説作品が二つある。東京帝国大学卒業直後の大正五年（一九一六）八月一日発行の雑誌「新思潮」第一年第六号に掲載された「仙人」と大正十一年四月二日発行の雑誌「サンデー毎日」に掲載された「仙人」である。題ばかりでなく、清の蒲松齡の「聊齋志異」に一部の材を取っている点でも共通する。前者は、単行本には収められなかった作品であり、あるいは何らかの不都合によって意に満たなかった作品ののかも知れないが、芥川龍之介の小説作法の一端を垣間見る一つの具体例として取り上げる。

作品末尾の日付によれば、脱稿は掲載のほぼ一年前で、大正四年（一九一五）七月二十三日である。二十三歳。この作品は、上・中・下の三部分よりなる。話の内容は、おおよそ次のようである。

上では、李小二の惨めな境遇が語られる。北支那の市から市

を渡って歩く李小二は、鼠に芝居をさせて口を糊している野天の見世物師である。雨期や冬場は、商売にならない。年の加減と身の具合が悪いこともあって、客舎の片すみで世故のつらさが身に染みる。不愉快、不安、人並に生きていこうという気さえ枯れてしまいがちである。何だかわらかぬ苦しみを与えるものへの無意識の憎しみにかられながらも、辛抱しろよと鼠に云い、己が運命を甘受している。

中では、李小二の運命が劇的に変化する。或寒い日の午後、ずぶぬれになって商売から帰る途中の李小二は、市はずれの廟で雨宿りをする。薄暗い廟の中には紙銭に埋もれた先客がいてぎよっとする。老道士である。廟の中から出てきた老道士は無口で、ろくに返事もしない。二人は入口の石段の上に腰を下ろす。老道士があまりにみすばらしいので、話しかける李小二の心の中には同情と優越感がわいてくる。しかし、優越感ゆえにかえって済まない心もちがしてきて、自分の暮らしの苦しさをつい誇張したり、老道士の窮状を正当化してやりたくて、蝗災

で農家一般の困窮がいかに酷いものかを話す。すると老道士は堪えきれないかのように笑い出す。同情は無用、あなたの暮らし位は助けて進ぜろという。老道士は、おもむろに廟の中に入ると、かき集めた紙銭を両手ですくい上げ、足下にまき散らす。紙銭は、手を離れると共に、無数の金銭や銀銭となって雨のように降り注ぐ。

下は、作者の後書である。作者自身が登場し、この話に対する解説がなされている。この話は、久しい以前に、何かの本で見たのだとあり、そして記憶が曖昧だという断わり付きで「人生苦あり、以て楽しむべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚、無聊なり、仙人は若かず、凡人の死苦あるに。」という老道士の四句の語が引用されている。李小二が、何故、仙にして乞丐をして歩くのかと尋ねた際の答えである。作者は、これに、「恐らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなつて、わざわざ、苦しい事を、探してあるにいたのであろう。」とその解を付して、この話を締めくくっている。

二

この作品の典故については、すでにアナトオル・フランスの「聖母の軽業師」、フレデリック・ブテエの「橋の下」、蒲松齡の「聊齋志異」から「鼠戯」「雨銭」「丐僧」「小二」「木雕美人」が指摘されている。以上の典故との比較については、今のところ、教えられることのみで、筆者の出る幕ではないが、『聊齋志異』との関係で言えば、「向杲」「山神」「丐仙」なども考察

の対象に入れてもよいのではないかと思われるフシがある。ただし、これは単なる読後感に基づいた思い付きに過ぎず、結論を下すには、それなりの手続が必要である。拙稿では、興味があるもので、話をその方向に絞って進めたい。

芥川龍之介の作品は、読んでいて引っかけりを感じるの間々ある。最初に読んで引っかけたのは、主人公の名である。この大正四年七月の「仙人」の場合、李小二という名が引かかるのである。余りにも中国的である。一般的には中国人の名が中国的で何の差障りもないわけであるが、李小二の小二というのは、名そのものではなく称謂である。称謂は、社会関係や家族関係の中で生まれる呼び方で、逆にいえば、称謂からそれが示されるわけである。小二は、酒店のボーイなどを普通は指す。この話の場合、李小二がなぜ李小二であるのか、ほとんど不明である。見世物師の名としてはピンとこない。作者が称謂であることを知らず、何処ぞからそのまま借用した可能性が疑われるのである。このようにのっけから疑問にとらわれたためもあり、作者にとつては好ましがらざる読み方であるかも知れないが、ついつい他の叙述についても疑問を引き起こすこととなつてしまった。疑問は、指摘されている典故を知ることによつて、多くは勞せずして解消し得たが、李小二の名に対するような解消し得ない疑問が残つたのである。

李小二は、鼠に芝居をさせている。鼠に芝居をさせるとするのは、種々の動物戯のある中国においても珍芸らしく、『聊齋志異』の「鼠戯」は、珍芸中の珍芸として引用紹介されること

も多い。李小二の商売に対して、作者が老道士に「それは又お珍しい。」と言わせているのは、作者が『聊齋志異』の「鼠戲」を読んだ際の思いでもあろう。

天氣がいいと、四つ辻の人通りの多い所に立つて、まづ、その屋台のやうな物を肩へのせる、それから鼓板を叩いて、人よせに、謡を唱ふ。物見高い街中の事だから、大人でも子供でも、これを聞いて、足を止めない者は、殆どない。さて、まはりに人の牆が出来ると、李は囊の中から鼠を一匹出して、それに衣装を着せたり、仮面をかぶらせたりして、屋台の鬼門道から、場へ上らせてやる。鼠は慣れてゐると見えて、ちよこちよこ、舞台の上を歩きながら、絹糸のやうに光沢のある尻尾を、二三度ものものしく動かして、ちよいと後足だけで立つて見せる。更紗の衣装の下から見える前足の蹠がうす赤い。——この鼠が、これから雑劇の所謂楔子を演じようと云ふ役者なのである。

すると、見物の方では、子供だと、始めから手を拍つて、面白がるが、大人は、容易に感心したやうな顔を見せない。寧ろ、冷然として、煙管を啣へたり、鼻毛をぬいたりしながら、莫迦にしたやうな眼で、舞台の上に周旋する役者を眺めてゐる。けれども、曲が進むのに従つて、錦切れの衣装をつけた正旦の鼠や、黒い仮面をかぶつた浄の鼠が、続々、鬼門道から這ひ出して来るやうになると、さうして、それが、飛んだり跳ねたりしながら、李の唱ふ曲やその間へはいる白につれて、いろいろな所作をするやうになると、見

物も流石に冷淡を装つてゐられなくなると見えて、追々まわりの人だからの中から、嗓子大などと云ふ声が、かかり始める。すると、李小二も、愈、あぶらがのつて、忙しく鼓板を叩きながら、巧みに一座の鼠を使ひわせる。さうして「沈黒江明妃青塚恨、耐幽夢孤雁漢宮秋」とか何とか、題目正名を唱ふ頃になると、屋台の前に出してある盆の中に、何時の間にか、銅銭の山が出来た。……………

(昭和三十三年筑摩版全集による。ルビ省略)

さて、この引用部分で興味深いのは、元曲用語の類出である。鬼門道、雑劇、楔子、正旦、浄、白、題目正名、これらの用語の正解を即答できる人は、元曲を専門とする人は別として、そう多くはあるまい。特に鬼門道などは、前後の叙述から能舞台の橋掛かりに相当するらしいとは想像できても、この語自体を知っている人は、少なからう。元曲の一般的な解説の中でも、舞台構造に筆が及ぶ以外は、希にしか言及されない語である。二十三才の英文科の学生芥川龍之介に他の元曲用語と共に鬼門道という語を知る機会があったことだけは確かである。しかし、その知識は、人ごとでもないのだけれども、必ずしもこなれたものとはいえない。馬致遠「漢宮秋」の題目正名は、正しくは「沈黒江明妃青塚恨、破幽夢孤雁漢宮秋(黒江に沈む明妃青塚の恨み、幽夢を破る孤雁漢宮の秋)」である。単なる誤植の可能性もあるが、たとえ誤植であつたとしても、この誤植は、「漢宮秋」のストーリー理解にかかわる誤植である。孤雁の一声によつて漢の元帝は夢より覚め王昭君の死を知るのである。幽夢に耐ふ

では何が何だか分からない。元曲用語の頻用に比して、不自然としかいいようがない誤りである。このような不自然な誤りが生じる背景として考えられるのは、現物を見る機会がないまま、知識だけが提供されているような場合である。知識が抽象的であると、フィードバックが効かないのである。もう一つの誤りは、正旦である。元曲では、歌唱するのは主人公一人と決まっている。それが男であれば正末、女であれば正旦である。「漢宮秋」で歌唱するのは、正末の元帝である。それ故、王昭君は、旦であって、正旦ではない。ちなみに悪役の浄は、毛延寿である。題目正名の破の字を耐の字に誤っていること、旦を正旦と誤っていることは、少なくとも芥川龍之介が「仙人」の執筆にあたって手元に「漢宮秋」のテキストを備えていなかったことを示唆している。ではなぜ元曲用語を頻用できたのであろうか。机上の空論に過ぎないかも知れない推定であるが、塩谷温の講義が最も関係ありそうである。芥川龍之介が支那文学概論をかなり熱心に聴講していたことは、松岡譲に証言がある（芥川のことども）。当時の支那文学概論を担当していたのは、塩谷温である。しかも塩谷温の専門は、元曲である。もつと松岡譲の証言は、卒業年度のことである。「仙人」は、大正五年（一九一六）八月一日発行の「新思潮」第一年第六号に掲載され、発表こそ卒業直後であるが、脱稿は、作品末尾の日付によれば、一年前の大正四年七月二十三日である。発表までに手が加えられた可能性もあるが、前年も聴講していたのかも知れない。塩谷温の講義内容がある程度に窺えるのは、大正八年（一九一九）

五月発行の『支那文学概論講話』である。鬼門道も『太和正音譜』から引用されており、「漢宮秋」も紹介されている。講義に於いても言及されていた可能性が高いであろう。拙稿にとつて最も興味深いのは、塩谷温が『支那文学概論講話』において「漢宮秋」の王昭君を正旦としていることである。これは明らかに誤りであるが、芥川龍之介の誤りと一致するのである。偶然の重なりとは思われない。講義中、塩谷温が「漢宮秋」の王昭君を正旦と板書し、それを芥川龍之介がノートしたと考えられなくはないのである。題目正名の誤りは、芥川龍之介の筆記ミスであろうか。以上は、推定というよりは、間接的材料によつての空想に近い。芥川龍之介の東京帝国大学時代の講義筆記ノートによつて、あるいは確認できるかも知れない。たまたま四月から甲府住まいである。山梨県立文学館には常設の芥川龍之介コーナーがあり、しかも東京帝国大学時代の講義筆記ノートも展示されているという。一日、ガラス越しに見るを得た。中国文学関係の講義筆記ノートであることは、ガラス越しで見にくいながらも、その一部から判断できた。しかし、できたのはそれだけである。確認は、今のところ、後日を待つしかない。なお、『聊齋志異』の「木雕美人」では、「昭君出塞」が演じられている。これについては、既に清水康次氏が注意を払っている。鼠が「漢宮秋」を演ずるのは、「木雕美人」にヒントを得たのであろう。

中は、「仙人」の山場といえる。この山場にも妙なところがある。李小二は、雨の中、市はずれの小さな廟に駆け込む。市はずれの路傍に小さな廟があってもよいと思うが、それが山神廟であるというのは解せない。山神廟は、城市における城隍廟や村落における土地廟に対応するもので、郊外の山中か、少なくとも山の近くにあるのが本来であろうと思う。ついでに言えば、城隍神や土地神が文官であるのに対して、山神は武官である。だからこそ金甲つまり鎧を着ているのである。「仙人」における山神廟の描写を引用する。

李は、廟を見ると、慌てて、その軒下へかけこんだ。先、顔の滴をほらふ。それから、袖をしぼる。やつと人心地ついた所で、頭の上の扁額を見ると、それには、山神廟と云ふ三字があつた。入口の石段を、二三級上ると、扉が開いてゐるので、中が見える。中は思つたよりも、まだ狭い。正面には、一尊の金甲山神が、蜘蛛の巣にとざされながら、ぼんやり日の暮を待つてゐる。その右には、判官が一体、これは、誰に悪戯をされたのだから、首がない。左には、小鬼が一体、緑面朱髪で、猙獰な顔をしてゐるが、これも生憎、鼻が虧けてゐる。その前の、埃のつもつた床に、積重ねてゐるのは、紙銭であらう。これは、うす暗い中に、金紙や銀紙が、覚束なく光つてゐるので、知れたのである。しばらく山神廟の三字を唱えるばかりで打ち過ぎ、よい知恵

も浮かばぬまま、六月二十九日に「竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢」(汲古書院)の完成祝賀会があり、小生も一冊頂戴した。祝賀会の後は何人かの方々とお酒を飲み、何やかやで新宿発二十三時五十分の急行アルプスに乗った。甲府まで二時間ちよつと、車中読むものといえば、頂戴したばかりの「竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢」があるのみであった。酔いつつ読む。須藤洋一氏の「都市の眼——異人としての英雄好漢——」で、酔いが覚めた。次のようにはあるではないか。

明代の挿絵には、第一〇回、小屋を雪で押し潰された林冲が、山神廟で身を安める場面があり、「金甲山神」の前に「判官」と向かい合つて立つ「小鬼」が描かれている。

これは、「水滸伝」中の、豹子頭林冲が焼き殺されかかるが、危うく難を逃れる第十回「林教頭風雪山神廟／陸虞候火烧草料場」の一場面である。芥川龍之介の「仙人」が素材の一つとして見ると見て、大過あるまい。早速、「容与堂本水滸伝」(上海古籍出版社校点本)で第十回を読み返そうとしたら、何としようばなから、驚かされた。

話說当日林冲正閑走間、忽然背後人叫、回頭看時、却認得是酒生児李小二。当初在東京時、多得林冲看顧。這李小二先前在東京時、不合偷了店主人家財、被捉住了、要送官司問罪、却得林冲主張陪話、救了他、免送官司。又與他陪了些錢財、方得脱免。

「仙人」の李小二の出自は、「水滸伝」なのである。登場人物名に関する疑問は、これで氷解した。「水滸伝」の李小二は、

酒店のボーイである。これが一般的な小二の使い方なのであるから、その称謂をそのまま鼠に芝居させる見世物師の名としていることが違和感を生じさせていたのである。

ところで「仙人」が「水滸伝」も参照していることは明らかであるにしても、その「水滸伝」とは、何であろうか。芥川龍之介が「水滸伝」を愛読していたことは、「愛読書の印象」(大正九年八月)に次のように見えている。

子供の時の愛読書は「西遊記」が第一である。これ等は今日でも僕の愛読書である。(中略)それから「水滸伝」も愛読書の一つである。これも今以て愛読してゐる。一時は「水滸伝」の中の一百八人の豪傑の名前を悉く語記してゐたことがある。

この「愛読書の印象」の記述からは、芥川龍之介が愛読した「水滸伝」が何であったのか、見定めることができない。翻訳であつたらう、ということとは分かるけれども、しかし、幸いなことに、高島俊男氏の「水滸伝と日本人——江戸から昭和まで——」(一九九一年二月 大修館書店)に、自伝的小説「大導師信輔の半生」(大正十三年)の記述に帝国文庫の「水滸伝」とあるのに基づき、芥川龍之介が愛読した「水滸伝」は、滝沢馬琴・高井蘭山の旧訳を活字版にした、帝国文庫の「新編水滸画伝」(明治二十八年 博文館)であるとあり、問題はたちまちに解決した。それゆえ、後日の機会に、国会図書館にて帝国文庫の「新編水滸画伝」を見るに、第十回の該当箇所は、次のように訳されていた。(一)内は、ふりがな。

那廟(かのやしる)のはとりに走りつき。傍辺(かたはら)に一塊(ひとかたまり)の石頭(いし)あるを見て撥将(ひらひとり)。かろらかに過來(もてきた)りて門に靠了(よせか)け。扉の風にあほらざるやうにこしらへおき。やがて裏面(うち)に入りて見るに。殿内(でんない)には塑著(つちさいく)の一尊(いつそん)。金甲(きんかう)の山神(やまのかみ)を安置(あんち)し。左右には判官と小鬼(さ、やかなるおに)とを立(た)てりしか。只(ただ)紙銭(しせん)のみ堆(つみ)おきて。鄰舍(となり)もなく。廟主(だうもり)もなかりける程に。拿来(もてきた)りし花鎗(てやり)と葫蘆(ふくべ)とを紙銭(しせん)の上(ほとり)に放在(さしおき)。彼の絮被(わたこ)を打ちひらきて座をト(しめ)。笠子(かさ)をとりて袖子(そで)の雪(ゆき)をうち拂(はら)ひ。懐中(くわいちゆう)の牛肉(うしのにく)を下酒(さかな)として。葫蘆(ふくべ)の冷酒(ひやざけ)を喫(のまん)とするに。

「仙人」における、判官の首がなかつたり、小鬼の猙獰な顔といった描写は、一見、作者の創作のようである。帝国文庫本には、そんな描写のタネは、ないからである。しかし、この「仙人」という作品は、気づいてみれば、作者が廟、それも古廟にこだわっているらしき気配があるのである。古廟が生と死のきわだった境界であり、文化的伝統の中で魔やエロスの力を顕在化させる不可思議な場であつたことと、作者のこだわりは何か関係があるであろうか。そんなことを考えている内に、宋江が九天玄女から兵法の書を授かる場面がフツと思ひ浮かんだ。あ

れも…確か…廟の中である……」。『水滸伝』の第四十二回「還道村受三卷天書／宋公明遇九天玄女」である。再び帝国文庫の『新編水滸画伝』の該当箇所を見るに、期待はずれであった。「仙人」との関連は見いだせなかった。ただ念のため「容与堂本水滸伝」(上海古籍出版社校本)の該当箇所を参照して、一驚した。「仙人」の描写と明らかな関係が認められたのである。『新編水滸伝』の省略部分(詩詞)を作者は利用していたのである。

牆垣頽損、殿宇傾斜。兩廊画壁長青苔、满地花磚生碧草。門前小鬼、折臂膊不頭猙獰、殿上判官、無幘頭不成礼数。供牀上蜘蛛結網、香炉内螻蟻穿窠。狐狸常睡紙炉中、蝙蝠不離神帳裏、料想經年無客過、也知尽日有雲來。

「仙人」の廟内の描写が「水滸伝」の第十回と第四十二回から想を得ていることは、疑いの余地もない。ただ小鬼が「緑面朱髮」というのは、首を傾げさせる。普通だったなら、「青面赤髮」ではなからうか。これは、作者の機知的な造語かも知れない。というのは、第四十二回に登場する九天玄女の使いの仙女が「朱顔緑髮」なのである。美と醜がその形容詞を交換するだけで手品のように入れ替わるあたり、作者の物の考え方が感じられるからである。『聊齋志異』の「陸判」に十王殿の神鬼の描写が「東廡有立判、緑面赤鬚、貌尤獠惡」とあり、これも造語のヒントになっているように思われる。

作者は、「仙人」を書くに当たり、「水滸伝」の原文を参照したのであろうか。大正九年の幸田露伴訳が出る以前にも新訳の試みはなされているので、その全てを調べてみなければ、確か

なことは言えないが、もし原文を参照しているとすれば、入手が容易であった金聖嘆の七十回本は、作者の利用箇所を省略しており、候補にならない。また容与堂本すなわち百回本は、内閣文庫に蔵されていたが、当時にあつては一般の閲覧は不可能であった。幸田露伴訳も百二十回本を底本としており、また塩谷温も百二十回本を推奨している。作者が原文を参照したとすれば、可能性が高いのは、恐らく百二十回本であろう。

なお滝沢馬琴を主人公にした「戯作三昧」(大正六年)の十に風雪山神廟への言及がある。「水滸伝」の中でも作者が好んだ場面なのであろう。作者が大正四年七月の「仙人」を単行本に収めなかったのは、作品の出来不出来のためではなく、別作品とはいえ、風雪山神廟が重複することを嫌ったためなのかも知れない。

独りで寂しい昼飯をすませた彼は、漸く書齋へひきとると、何となく落着がない、不快な心もちを鎮める為に、久しぶりで水滸伝を開いて見た。偶然開いた所は豹子頭林冲が、風雪の夜に山神廟で、草秣場の焼けるのを望見する件である。彼はその戯曲的な場景に、何時もの感興を催す事が出来た。

四

下は、前述のごとく、いわば後書である。「この話を、久しい以前に、何かの本で見た」と作者はいうが、これまでの指摘と拙稿でのピックアップを付け加えると、アナトール・フラン

スの「聖母の軽業師」、フレデリック・ブテエの「橋の下」、『聊齋志異』の「鼠戯」「雨錢」「木雕美人」等、それに『水滸伝』の第十回、第四十二回が「仙人」の構想と展開の素材となっている。何かの本で見たという作者の言葉は、確かに幾ばくかの真実が含まれている。管見の範囲であるから、恐らくこれに止らないであろう。かつて作者の「杜子春」について論じたこと（芥川龍之介の「杜子春」―鉄冠子七絶考―徳島大学国語国文学第二号）があるが、そこで指摘した材料ばかりでなく、『西遊記』の第二回その他も使われていることに、後になって気づいた。このような類祭魚的な小説作法がすべて記憶によってなされたとは考えがたいことである。机の周囲に発想の素材となる多くの書籍が並べられ、それが作者によって統括されていったのだと思われる。

「人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚、無聊なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに。」の四句を作者は基づくところがあるかのように掲げ、「恐らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなつて、わざわざ、苦しい事を、探してあるいてゐたのであらう。」と、この作品を締めくくっている。キーワードの死苦は、四句の語呂合わせであるようにも思われるし、この四句から原文を復元しても各句の字数が不揃いとなる点はやや不整合な感があり、作者の類祭魚的な小説作法と広範な読書領域からして断言はできないけれども、逆説を好む作者の戯作ではなからうか。死を

人間の運命とする儒教の考え方と近いようで離れており、道教的な世間遊戯の考え方も違い、仏教的な世間苦行の考え方も異なる。何かの本で見たという作者の言葉は、むしろ四句に出典があるかのように印象づけカムフラージュであつて、直接の出典があるとは思えないのである。

注(1) 拙稿をまとめるに際して、本文中での言及の外、以下の著書論文を

参照した。藤田祐賢「聊齋志異」の一側面―特に日本文学との関連

において―(『慶応義塾創立百年記念論文集』昭和三十一年一月、篠

塚真木「芥川龍之介の創作とアナトール・フランク」(成瀬正勝編「大

正文学の比較文学的研究』昭和四三年三月、明治書院、今泉真人「芥

川文学と「杜子春」―特に龍之介の人間性に触れて―(『語文』(日大

第三十輯)昭和四三年九月、矢作武「芥川龍之介と中国文学」(二)

―聊齋志異との関係―(『笠間選書』二七、谷崎潤一郎、古典と近代作

家 第一集)昭和五四年三月、清水康次「羅生門」への過程―岩森

龜一氏所蔵の資料を用いて―(『国語国文』昭和五七年九月、石刻透

「仙人」―「橋の下」との関連―(『新鋭研究叢書四』芥川龍之介―

初期作品の展開)昭和六十年二月、有精堂。高島俊男「水滸伝の

世界」(一九八七年十月、大修館書店。

(2) 『支那文学概論講和』が参考に掲げる『太和正音譜』からの引用の一部

を返り点を省略して示す。「鬼門道、杓欄中戲房出入之所、謂之鬼門道、

鬼者言其所扮者皆是已往昔人、故出入謂之鬼門道也」

(なるせ・てつお 山梨大学教育学部助教授)